



緑爽会報 NO. 109

12年 6月25日

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎ 03-3261-4433

事務局 松本恒廣

夏原寿一 近藤雅幸

近藤 緑 川口 章子

横山 隆 渡部 温子

「映像とお話」

バイカル湖の旅

富澤 克禮

今回の旅は、「山の自然学研究会」主催の海外巡検行事「バイカル湖ハイキング〜ロマンあふれる地形学と高山植物の宝庫〜」に参加したものである。

参加者は私を含めて5名、エージェントは、ユーラスツアーズである。この旅行会社の社長の坂田氏は、「山の自然学研究会」の会員でもあり、今回の旅でも、7月12日までわれわれと同行、巡検の仲間であると同時に添乗員の役目を果たして頂いた。



シベリア鉄道組と飛行機組と分かれての出発となった。シベリア鉄道組の坂田氏を含む4人は、2011年7月7日成田空港からウラジオストクに向かった。空港からホテルまでの1時間あまりを車で走ったが、途中は、2012年9月に開催のAPERCの準備のため大規模な道路工事が行われていた。翌8日は、ウラジオストクの市内見学の後、夜、シベリア鉄道に乗車、列車の旅のスタートである。

シベリア鉄道は、今回の旅の目的の一つでもあったので、大変楽しみだ。列車は、8日22時30分に定刻どおり出発した。いよいよシベリア鉄道の旅の出発である。車内は、快適で旅の疲れもあり熟睡できた。長い列車



フィールドガイドのワレリーさん



雄大なアムール河の流れ

姿を見せられた。14日、植物観察の2日目。船で約1時間。カデイリナヤへ。ここでは、エーデルワイスやシベリヤヒナゲシも見られた。今日

の旅は、車窓の景色をながめたり、途中駅の売店で食料を調達したり、ロシア語のアルファベットのわか勉強をしたり、美人の車掌さんや、隣接するコンパクトメントの子供づれの客達とも仲良くなったりで、退屈することなく目的地のイルクーツクに11日夕方、定刻どおり到着した。ここで、飛行機組の2人とホテルで合流、全員が揃った。

翌12日は、バイカル湖畔の町リストビヤンカへの移動である。途中、展望台からバイカル湖を望み、博物館、植物園に立ち寄りバイカル湖についての基礎知識を仕入れる。ここまで同行の坂田氏と別れる。

13日、植物観察の第一日目。船で約1時間目的地に到着。パド・チョルナヤへ。フィールドガイドは持参の植物の図鑑で、ラテン語の学名を示してくれたので正式な名前を知ることが出来た。鮮やかな朱色のカノコユリ、イブキジャコウソウ、シヤジクソウ等も見ることが出来た。昼食は、彼が作ったキャンプの飯盒炊爨の雰囲気を楽しんだ。植物観察をしながら、宿泊地のポリシヨイ・コテイまで散策。湖面に時々バイカルアザラシが

も昼食はフィールドガイドの手製の料理である。夕刻、船で約2時間、リストビヤンカに戻った。15日晴れ、イルクーツクに戻る途中、木造建築博物館を見学、午後はイルクーツクの郷土史博物館、教会等の市内見学。

16日、ブリヤート族の博物館やシャーマンの儀式を見学。深夜にホテルをチェックアウト。空路ハバロフスクに向け出発する。17日、早朝、ハバロフスク空港着。ホテルへ移動。午後、ハバロフスク市内見学。雄大なアムール川の流れは印象的であった。

18日、ハバロフスク空港から帰国の途に。世界自然遺産のバイカル湖は、人の手が加わっていない自然のままの素晴らしい姿を見せてくれた。いつまでもこの美しい姿を後世に残して欲しい。(6月17日 於・緑爽会総会)
●暑気払い 七月一九日(木) 一三時、於・JAC会議室 会費 千円 準備の都合上、要申込 ☎&FAX 03-326-2892 松本 迄

「奇稿」

宮下啓三さんのお仕事

— 『山行』のドイツ語訳 —

杉本 賢治

藤沢教会での前夜式に参列したのがきっかけで、緑爽会報がインターネットで読めるのを知りました。さっそくプリントして『遺言を語る』ができて私はいれしく思っています。『感銘を受けながら「増えた山の名、消えた山の名」を読み終えました。』

宮下さんとお会いしたのは「喜の会」が初めてだったと思いますが、宮下さんが農鳥岳で串田孫一さんと遭遇したときに、『アルプ』137号) 同行していた保科清子さんと三井基子さんから、この出会いについて「まいんべるく会」でお聞きしていました。

山仲間三輪利雄くん(永年会員)や山岳会入会で紹介者になって下さった山下一夫さんの子息である隅野成一くんなど五人がいます。三輪くんと克子さん(エーデルワイス・クラブ)の一粒種が今井喜美子さんのお弟子になり、学問でも宮下さんのお弟子さんになったという縁があり、ドイツ在住の仕事仲間が宮下さんの教え子という偶然もあって宮下さんには片想いの親しさを感じていました。

引退後やっと思行けるようになったアルプス周辺の山歩きで知り合ったグリーンデルヴァルトの知人が、Hütteなる休暇住宅に改築したのを機に仲間が毎年のように同家に滞在して知人一家と親交を深めています。



アイガー東山稜初登頂を果たし地元の人たちやガイドらと喜び合う榎有恒(中央)

その知人から、アイガーについてまとめた本が出たからと送られてきたのが『Eiger The Vertical Arena』^①でした。アイガー北壁の登山史を歴史のおよび地理的なエピソードを交えながら登攀に関わった人たちの奇稿を編集した本です。題名のように本文も英語で書かれていますが、英語版によると原本は『Eiger die vertikale Arena』^②なるドイツ語の本です。編者は Daniel Anker (ベルン在住) となっています。

目次を追いますと、取付きから頂上まで、北壁の古典ルートに沿った要所とそこにかかわるエピソードが書かれていることがわかります。A頂上氷田VとAミッテルレギ稜Vの間に「グリーンデルヴァルトと日本におけるアイガーの意義」なる章があり、Aミッテルレギ稜VとA頂上Vの間に「アイガー北東稜の初登攀」という章が置かれています。

「アイガー北東稜の初登攀」はとりわけ重要な章で、ほとんど全文が榎さんの『山行』をそのまま読んでいくようでした。榎さんが撮った写真も挿入されています。これだけの長い記録をどなたが訳されたのだろうかといぶかりながらも、一読するだけで終えてしまっていました。

緑爽会報106号で遺稿を拝読して、はじめてこの翻訳が宮下さんの手によるものだと知りましたが、残念な記述もありました。「日本山岳会の会員たちに気付いてもらえないので、自分からこの事実を報告させていただいた次第です」とあるのです。あらためて手元の英語版を見直しました。見落としがあつたかもしれませんが、どこにも宮下啓三の名が見当たりません。英語版しか読んでない自分の怠慢を棚に上げて、近藤緑さんにお手紙をさしあげました。本のどこにも翻訳者が紹介されていないのだから、会員が気づかれないのも無理ないのではないかと生意気なことを書いてしまったのです。

近藤さんから即座にご返信をいただきました。山岳会図書室にあるドイツ語版を見るようにとのご示唆でした。その通りです。宮下さんご自身が、「ドイツ語に翻訳しました。日本山岳会の図書室にある『Eiger アイガー』という美しい書物の中に私の訳が収められています。」と書かれているのですから、これを読まずして、勝手なことはいえませぬ。

図書室で探し出していたドイツ語版は頁数が英語版より多く、写真を挿入した頁も違います。Aミッテルレギ稜Vの頁に直行し、宮下さんの名を探しました。英語版の扉には奇稿者とならんで翻訳者の名前が書いてあるくらいだから、ドイツ語から英語への翻訳には十分な

注意が払われていて、内容は同一だろうと考えていたのが大間違いでした。ドイツ語版には宮下さんがドイツ語への初翻訳者であるときちんと紹介されています。また奇稿者としての宮下さんの紹介も別頁にあります。それらは次の通りで、英語版にはまったく欠落している字句です。

A. 登山史で重要な『山行』の一章を初めてドイツ語に翻訳されたのが宮下啓三氏である。(ドイツ語版264頁アイガー北東稜の初登攀)

B. 宮下啓三 (1936年生) 榎有恒氏の文を翻訳した。東京の慶応大学ドイツ文学教授、日本山岳会会員。著作に『スイス・アルプス風土記』(1977)、『ウィリアム・テル伝説』(1979)、『700歳のスイス』(1991)がある。いずれも日本語。(ドイツ語版260頁)

他の頁にも宮下さんのお名前が出ていますかと思いますが、ひさしぶりの読書で目が疲れました。ここまで導いて下さった近藤緑さんに感謝し、宮下さんの霊安かれと祈りつつ、これにて終えます。

脚注

- ① 2000年 The Mountaineers Books (シートル) 出版
- ② 1998年 AS Verlag & Buchkonzept AG (ツューリッヒ) 出版

★ 編集後記 ★ 奇稿された杉本さんは往時の串田孫一アンサンブルのメンバー。斜里のアルプ館での記念演奏を前に猛練習中とか。★ 「東北支援の夕べ」に向け、こちらもリハーサルに懸命。(K)